哲學研究　第百四十二號

惡の問題に就いて

西谷啓治

惡とは何であるか。極端にいへばこの世界は惡の世界であり、人の性も抑々その本質は惡であるとすら考へられぬことはない。惡の起源は果して何處にあるか、とは人の智と共に古き疑問である。全能なる神は何故に惡なる現象を創りまたその存在を許し給ふか、といふことは恐らく總べての宗教家の頭を惱した問題であつたらう。理性の無限なる要求を負ふたる吾々は、この或は考ふべからざる問題をも考へて見ねばならぬのである。

（一）

ヴィンデルバントは、規範の體系は自然法則的に可能なるものゝ無限なる多樣より選擇することを意味するといつて居るが、一方より考へれば現實の意識は或る價値を有するか有しないかである。規範的意識であるか反規範的意識であるかである。價値判斷に於ては、一方意識の活動は自然必然的過程であると共に、軌範はこれ

を超越して存立する標準または單なる形式と考へられるのであるが、生きた實在に於ては價値は內面より働く力でなければならぬ。

併しかく考へれば反價値と雖も一の內面的力の如きものと解せられねばならぬ樣に思はれる。抑々 die Naturnotwendigkeit des Normwidrigen とは何を意味するか。所謂「意識のアンチノミー」とは何處より生ずるか。das Normmässige と das Normwidrige との區別は本來如何なる處より來るのであるか。

こゝに二つの立場を區別する必要がある。一は、理性的なるものは現實的であり、現實的なるものは理性的であるといふ見方であつて、こゝに於ては、反規範的なるものも單に現實的であるが故に既に價値ありとせられる。價値は生きた實在としては內に反價値を含む。高き價値は高き反價値の征服を意味する。高き價値程內に深き矛盾を藏する、深き矛盾の上に根差すのである。この立場に於ては、反價値は價値に反しつゝ然も自身價値に與かる。ヘーゲルが Schuld der Unschuld といふ如く、單なる無邪は反つて邪であり、墮落も單なる純潔より價値ありと考へられる。運命の上に於て一歩を進むからである。

同時に吾々の現實の意識に於ては、反價値は飽くまで反價値として分明に區別せ

られてゐる。これは何故であるか。一々の可能的なるものが直ちに現實的である絶對者は、自己內靜止の超越的一面と共に分裂の一面を含む。卽ちdas Andere, das Negativeを定立する働きを有すると考へられる。前の面を背景としてこの面を見れば、ライプニッツの如く無限なる可能的世界の中より最善の世界が現實として創造されると云ふを得やう。之に反してこの面をfür sichに見れば吾々の前には無限なる爭鬪、無限なる動搖の二元的世界が展開されるのである。私は現世を厭ひ來世を冀ふ厭世觀と、總べてはこの儘でよしといふ徹底せる樂天觀とは相去る一步であると思ふ。この分裂界に於てdas Andereはdas Falsche として姿を現すのである。現實を最善の世界として見れば、一々の誤謬、一々の罪惡も吾々の成熟の歷史のうちに獨特の意義を有するのであるが、然もfür sichには價値と反價値とは截然と區別され、同時に兩者の有機的創造的聯結は沒せられて、單に規範に對する合反によつて判定せられ取捨せられるに至る。

然らば規範とは何であるか。規範が規範たるは何によるか。私はそれは絶對者が內に規範的・反規範的の對立を含みつゝ然も規範的である、といふ性質に基くものと考へる。絶對的な自我の本質が規範的である故、自覺に於て所謂經驗的自我が絶

對我に觸れるとき、兩者の結合は先づ規範の一點に成立するのである。規範は自我が時間を超越して絶對者に結合するとき自我に現れる。

自覺とは個性の成立を意味する。普通に意識は何人かに屬すると考へられるのも、自覺に於て意識が個性的統一に入り來ることを意味するのである。具體的なる意識はかゝる統一のうちにのみ存する。知覺的意識や衝動的意識に自覺の意識が加つて統一が成り立つと考へるのが普通であるが、カントが自覺の先驗的統一といふ如く自覺の意識は反つて意識の基礎である。自覺は意識內容の全體の意味を變ずるものである。「衝動的な意識現象といふのは、眞に獨立なる個性的な意識現象から或物を減じたものと云ふことが出來る。かゝる意識現象は、物質界といふ如き一般的主觀の對象界が存在すると同樣の意義に於て存在することが出來るといふまでゞある」（西田教授「社會と個人」）。

かく吾々の個人的意識は自覺による個性的統一に基くものであつて、所謂意識一般はかゝる自覺的意識のうちに現れ來るものであり、自覺に於て吾々は認識客觀界を自己のうちに鎔かし込むことができる。意識一般の基となる自覺そのものは、單に一般的なる知識我を超えて個性的統一の成立することを意味するものである。

知識我の根柢には動的行爲的自我を豫想せざるを得ない。從つて眞の自覺は道德的自覺である。道德は Ich bin Ich といふ確信より生れる。而して道德的自覺に於て個人的自我が絕對者に結合すると考へらるゝと共に、かゝる自覺が抑、絕對者の働きによるものであり、その顯現であると考へられる。併し純粹意志を根本とする內面的見方よりすれば、この二つの方向は實は一の純なる行である。自覺に於ては反省の根柢に直觀がある。反省と直觀とは一の作用の兩面である。具體的には瞬々に於ける唯一自由我の活動あるのみである。永久の今に於ける動靜一如の人格內容あるのみである。唯この現在の意識に於て縱橫二つの方向を區別することが出來、直觀と反省、絕對我と個人我等の差別が生じて來るのである。先に絕對者が自身分裂するといつたのはこの謂である。而して原統一は die Mitte として文化の創造的主觀たるヘーゲルの das allgemeine Individuum の如き形に於て兩者の接觸點と考へられる。

自覺の性質がかくの如きものとすれば、個人我は自覺に於て絕對者と結合することにより、その內に於ける二つの流に自己を沒して Sichselbstgleichheit の究竟的統一への努力そのものとなる。究竟的統一は超越的軌範として、個人我のうちに於ける當

爲の依つて來る處となり、das Andere は彼のうちの反軌範的なるものとなるのである。

（二）

今右の如き考をもう少し詳しく考察して、惡の問題に近付いて見たい。

一々の純なる作用に於ては、反省と直觀とはその兩面をなす。而も反省も直觀のうちに生ずるのであつて、直觀は反省を含んでこれを超越し、反省は直觀より出でゝ直觀に歸る。然もこれは直ちに第二の反省を意味するのであるが、純なる作用そのものは das An-und-Für-Sich への唯一の發展と考へられる。

今ライプニッツが The only immediate object of our perceptions which exists outside of us is God and in him alone is our light. (Discourse on Met. § 28) といつた如く、無限の直觀內容、卽ち可能的なるものが直ちに實在的と考へられる如き世界を、反省を以て覆はんとすれば、作用と對象との無限の對立が初まる。作用がメー・オンを背景とせる或一範圍の意識を維持する立脚地と考へられるのもこの故である。總て意識は具體的一般者の自發自展、純なる作用である。或は意識はライプニッツの「知覺」の樣相であるに止つて本質ではないといはれるかも知らぬが、統一の中に於ける多樣の表出とは、眞實に

は、綜合の上に新らたなる意味の生ずる精神現象に於て初めて可能であると考へられる。而して更にライプニッツがExpression is common to all forms, and is a class, of which ordinaey perceptions, animal feeling and intellrctual knowledge are species.(Duncan's Translation. p. 312)といふ如く、知覺も思惟も、各々の立場に於て無限なる具體的經驗全體を統一する抽象的形式と考へることが出來やう。そしてこれ等の形式が自己の內容を喰み行く所に、或は(他面よりいへば)先天的所與が創造的發展をなす所に、作用が現れ、その對象と界を統一するのであるが、而もその力足らずして統一は不完全に止まり、その對象との關係が恒に不齊合である故、統一は飽くまでも對象として獨立して第二の作用の對立を喚び起すのである。ライプニッツが It is not in the object represented that the Monads are limited, but in the modifications of their knowledge of the object. In a confused way they reach out to infinity or to the whole, but are limited and differentiated in the degree of their distinct perceptions (Monad. § 60)といふ言葉更にヘーゲルが das Wissen vom ersten Gegenstande oder das Für-das-Bewusztsein des ersten Ansich soll der zweite Gegenstand selbst werden, ……womit auch eine neue Gestalt des Bewnztseins auftritt. (Phänom des Geistes. s. 61)といふ言葉をこゝに當嵌めて考へることが出來る。ライプニッツが、宇宙を內容とするモナドが其性質のうちにkegun

continuationis seriei suarum operationem を含むと考へるのもこの意味であらう。而して同時に各モナドが、無限なるモナドを自己の內容とする「モナドのモナド」によつて創造される如く、具體的一般者は抽象的なる作用に對して自己を對象として定立しつゝその作用の系列の極限となる、卽ち一々の作用は具體的一般者が自己自らと versöhnen せんとする努力であると考へられる。

今具體的經驗そのものゝ形式を純なる意志と考へ、思惟はかゝる人格的最高統一の一般的方面を表すものとすれば、この無限なる作用の統一、作用の無限なる連續の一限定として認識對象界が現れ、意志はかくの如き連續そのものとなる。純なる意志に於て創造的發展の最も純なる形を表す自我は、認識對象の世界と世界との連鎖であつて、かゝる純粹なる推移が自我の實現であり、純なる行爲である（西田教授「意識の問題」二二頁）。卽ち意志に於ては作用と對象とは完全に合して唯一なる內面的作用となる。意志は相反する二つの方向を一線に結ぶ力である。一方感覺が思惟によつて構成を受け同時に解決さるべき問題であると考へられると共に、他方感覺的性質が經驗內容として、それ自身の實在性を有するとせらるゝのもこれに基くのである。

作用と對象との無限なる對立は、內面的には純なる作用の發展である。純なる作

用はヘーゲルの所謂das Einzelne の働きである。Das Einzelne ist dasselbe, was das Wirkliche ist, nur dasz jenes aus dem Begriffe hervorgegangen, somit als Allgemeines, als die negative Identität mit sich geseszt ist (Ency. §163)といはれ、das Wir kende seinerselbst である、といはれる das Einzelne は、一般を含める特殊である。具體的一般と抽象的一般との結合點、天と地との相接する「人」である。das Einzelne が自己の内に反省することによつて顯れる對象界は、含まれる一般者が其 das Einzelne を超えてその前方に自己の姿を投射した影である。否 das Einzelne より見れば自己のうちなるものが先づ自己の外に顯れるのである。モナドが混亂知覺を有するといふ如く、das Einzelne が差別界の現實化の原因であり、濁りの由來する處であり、又これによつて初めて一般者に具體的と抽象的との別を考へる事が生ずると見ることが出來る。

外に出づることは内に歸ることであり、das Einzelne は自己の影を滅し行くことによつて、自己に歸る。外の對象を滅ぼすことは内から對象を生産することである。Erzeugung seltis ist das Erzeugnis といふのも此生産の面をいつたものであらう。かゝる活動は無限なるものゝ有限的統一として、特殊的統一より特殊的統一に行く。その際具體的一般者は各統一の背後にあつて之を貫き之を結合する具體的内容であり、

特殊的統一より見ればその課題である。統一のうちに働きその連續を可能ならしめる力である(五一頁)。即ち一の高次の作用であると云ひ得やう。具體的一般者は作用の作用である。無限なる作用とその對象を外發し攝取する力である。特殊的の純なる作用もかゝる作用の作用への結合に於て成立する。純なる意志に於ては作用と對象とは完全なる動的合一に入ると考へられるが、特殊的の純なる作用はその representation, expression である。即ち一般としての作用の作用によつて放射されるのである。das Einzelne ist das Allgemeine はかゝる意味を含む。

かく具體的一般者は對象として自己を定立することによつて無限なる作用を喚び、(他面から見れば)作用として働くことによつて無限なる對象界を生産すると考へられる。私はこゝに於て、總て個體の價値を否定して宇宙に神の自愛のみを見たといふスピノザに一面の眞理を認めざるを得ない。先へ進むことは元へ歸ることである。主客兩面の合一である。具體的實在の活動を內容上より見れば、一の內容はより高き內容を要求するが故に、內容の充實に向つて即ち客觀化の方向に進むのであるが、それを意識として見れば、ヘーゲルが意識の本質を具體的一般者の自己分裂より生ずる矛盾にあると考へた如く、意識我は具體的の自己に歸る。而して意識は

內容を得て具體的となるに從ひ、內容のうちに自己を沒し自己を忘れる。主觀化の方向は同時に客觀化の方向であり、また外面的なるものは直ちに飜して內面的なるものと見ることが出來る。現實界に於ては unmittelbar なるものはないのである。

與へられたるものは求められたものであることは、同時に求めらるゝものが與へられて居ることを意味する。然らざれば求めるといふことすら考へられぬ。求めるといふことは、問題として與へられた或物が解決を迫ることである。求めよ然らば與へられんといふ如く、求むることは、二つの世界の切磋を意味する。ライプニッツは能動と所動について that which is active in certain respects is passive from another point of view, active in so far as that which we distinctly know in it serves to give a reason for that which occurs in another, and passive in so far as the reason for what tsanspires in it is found in that which is disinctly known in another. (Monad. 52) といふが、純なる作用は求めるこゝゝ與へられてゐるこゝの中間に閃くのである。ヤコブ・ベーメも Wenn derselbe Geist, welcher im Körper geboren wird, durch die Augen etwas ansieht, oder durch die Ohren höret, oder durch die Nase riecht so ist er schon in demselben Dinge, und arbeitet darin als in seinem Eigentum. Und so es ihm gefällt, so isset es davon und infizirt sich mit dem Dinge, und ringet mit ihm und macht eine Temperanz. (Aurora.

S. 164) と云つて居る。

かく反省と直觀との錯綜なる或はベーメの言葉を藉りれば反省のうちに直觀がaufsteigenする純なる活動を、反省の面に着して見れば、ヘーゲルの所謂「概念」の活動となる。純なる活動に於ては、恰も畫家の純なる創造作用に於ての如く、いはゞ平面に現はれる無限の變化が同時に無限なる奥行への進行であるが、概念の發展はかゝる活動を全く平面上に投射して見たものである。概念に於ては一般より個別に行く。die Besonderheitはその中間に於て、個別者の限定性を一般の上に印する。die Bestimmtheit, in welcher das Allgemeine ungetrübt sich selbst gleich bleibt. である。反省によつて爲されたる切斷の痕である。ヘーゲルがA-B-Eの形を擧げたのは連續的なるものを切斷して、その斷面に表れたる固定された流動の姿を一聯鎖として示したものであらう。一なる連續をその裏と表とに分けて、一の裏と次の表とを一つの型として見るのが所謂ディアレクティークである。反省を去つて直觀的に見れば、自らを限定し行くものが自らに負はされた運命であるReflexion-in-sichを磨却し行くことにより、自己限定の方向に進むと同時に一般者を顯はす。眞の流動に於ては裏と表と一である。裏もなく表もない。eine Durchdringung der Geraden und der Krummen である。圓環運動をな

す[概念]そのものゝ働きの直線的連續である。ヘーゲルが概念の三要素の各々は他の要素を含むといふのは、かく眞の流動が渾一なるものゝ發展であることより來るのである。連續の切斷面には恒に三つの要素が存在する。唯特殊は das Ar-und-für sich Bestimmte であつて、一般者は抽象的に、即ち種子として、そのうちに含まれる。連續はこの兩者の間の爭ひより起るのである。

可能的なるものが直ちに現實在的であるといふ如き動靜一如の究竟的立場に於ては抽象的一般は消えるであらう。唯、一歩下つて反省を混えた立場に立つ時、動と靜とは分れ縱の世界(自己限定の發展)が横の世界(一般への統一)を拔け出ると共に、有限なる縱の世界を通して見られた横の世界は抽象的になる。奥行きなき平面となる。發展が未だ自己自身に歸らず、未だ自己内反省を滅ぼし切らずして、途中の段階にある時、其處に立つて見られた統一は抽象的一般である。一般が抽象的なるは反省の處作である。もし、すべてかゝる自己内反省を脱却しない立場を統一する原理を反省的自我と呼ぶならば、抽象的一般は反省的自我の觸れる所に生ずるのである。

所謂自然界は反省的自我の對象界である。Besonderheit の世界である。純なる創造的發展は瞬々に於ける同時存在の世界の燃燒によつてなされる、瞬々の死によつて

生の發展があるのであるが、反省の一面に着して見れば個別に含まれる一般は自己を前に投射する。自然界はすべて一般者の抽象的方向の極である。從つて最も根本的である。究竟的統一の全き抽象であり、之と所謂佛魔一紙の關係にあると考へられる。自然界が反省的自我の對象界であるといふことも、究竟的統一の上に捲き起る無限の分裂、そのうちに戯れる無限の葛籐、卽ち絕對的自我の上に於ける自我の無限なる動きを、純粹なる根本的の形に還して表現したものにすぎない。卽ち一方に於ては意識一般とか自覺の先驗的統一とかいふ無內容なる方面と共に、他方自然界は之より獨立して物の世界となる。普通に反省といへば、既にGeistの圈域に入れる純粹思惟の作用を考へるのであるが、これはヘーゲルの體系に於てNaturが既に論理界に於けるIdeeのうちのBesonderheitに根差すといふのと同じ意味に於て、GeistとNaturとの原初的なる分裂がGeistの圈域のうちに現はれ來ることを暗示するものであらう。(ベーメはこれをim Herzen gebüren といふ。) 他面より見れば感性的內容が既に思惟の構成を受けてゐると考へられつゝも、又それがInkommensurabilität を有して全くこの方向の構成に入り切らぬといはれるのも、この原初的分裂を示唆すると考へ得る。原初的分裂を惹き起すことによつてあらゆる分裂の源となる非合理性

の極は、すべての合理化に先立つ。眞のNaturはヘーゲルのMeinen以前である。

創造的發展は作用と對象との動的合一である。力を本質とするモナドの活動である。個別と一般とは各々他のうちに自己を見出し、他のうちに自己を產んで而も自己として立つ。無限なる發展はこれより生ずる。かゝる內面的關係を反省の面に映ずれば、一切の對象は獨立して自然界となり作用は無力となる。作用を離れたる對象の內面より作用が消えるのである。又對象より離されたる作用は內容なき純なる自我の中に沒する。かゝる外面的關係に入れる作用は、對象と共に自然的立場に墮して、單なる心理的作用となる。作用は働きを卽ち他との結合を本質とする。他との結合なくして作用は虛無であらう。故にそれは自己の前にfertigに見出されたる自然界に結合し行くのであるが、而も自己をその中に沒しその中に自己を產み出すことは出來ずして關係は外面的に止まる。卽ち作用は入りては、無內容なる自我のうちに消え、出でゝは對象に引かれて單なる心理的自然現象となる。總べてが一枚の明鏡裡に收めらるゝ如く、自然界の出現と共に縱の連續は一面に於て皆同時存在の平面界に墮す。而してdas Absoluteの上に於てこの分裂は瞬々に行はれて居るのである。ヘーゲルはDie gesetzte Besonderheit des Begriffs ist das Urteil. といひ更にDer

Standpunkt des Urteils ist die Endlichkeit, und die Endlichkeit der Dinge besteht auf demselben darin, dasz sie ein Urteil sind, dasz ihr Dasein und ihre allgemeine Natur (ihr Leib und ihre Seele) zwar vereinigt sind; sonst wären die Dinge nichts; aber dasz diese ihre Momente auch wesentliche Selbständigkeit gegeneinander haben, daher sowohl bereits verschieden, als überhaupt trennbar sind. (Ency. § 168) やうに更にまた論理より自然に移るに際し、Die absolute Freiheit der Idee ist, dasz sie…in der absoluten Wahrheit ihrer selbst sich entschlieszt, das Moment ihrer Besonderheit oder des ersten Bestimmens und Anderssein, die unmittelbare Idee als ihren Widerspuch, sich als Natur frei aus sich zu entlassen. (Ency. § 244) といつて居る。

眞に眞なるものは具體的一般者である。das Wahre ist das Ganze である。眞に具體的なる一般者は靜的全體であると同時に一切の動の根元である。一切の活動は目的を有する。目的の目的は目的の沒落にある。目的は無に歸する、無は一切の現實態の根元である。最高の「概念」は「概念」自身を超越する。nec creata nec creans である。かゝる無が目的の目的である。從つて有の世界に於ては一切の作用も對象も das Falsche である。有るもの卽ち das Einzelne は特殊的に限定されたものである。反面に抽象的一般を含む。卽ち反省の處作を含む故、Natur の薰染を免れないのである。

その世界に於てはまた自由も必然を伴ひ、直觀も反省の背後にのみある。

（三）

吾々は究竟的統一の全き抽象（ヘーゲルの所謂 absolute Abstraktion）としての抽象的一般が出現するのを、今迄漠然と反省の處作と見做して來た。併し反省には二つの意味を、寧ろ二つの行を、區別せねばならぬ樣に思はれる。――抑々 das Einzelne は二つの方面をもつ。いはゞ insichsein, selbstständig の個別性の面と、一般的方面とである。（ヘーメの所謂 herbe Qualität と Wasserqualität）。純なる創造的發展はこの兩面が純粹に合一して、相貫き相喰むことによつて生ずるのであるが、かゝる純粹なる意志的發展は理性に於て反省のうちに入る。これが第一の意味の反省である。理性の面に映される時、曩の兩方面は分たれ、而してその各々の面に立つて更に兩面を見ることが可能になる。（一）個別性の面に於て個別性を見たものが具體的個別者である。（二）一般性を見れば、個別者は自己の根柢に一般を見出す。（三）一般の面に立つて個別を見れば、一般の分化發展が現はれ、（四）一般自身を見れば靜的全體である。もし本來の純粹なる意志的發展に於ける要素の融合を失はずして、その基礎に於てこの全體を見るならば、（二）と（三）とは相合して具體的一般の動的方面となる。その分化發展の還相

と往相とである。唯一なる發展に於て、特殊が益々特殊的に限定されると同時に、一般者を次第に顯現して行くことである。(一)と(四)とはその靜的方面である。究竟的統一に於て、個別者が全く限定され、同時に一般が充實された世界である。而して更にこれ等の全體は、本來の全發展に於ける無限なる流動と無限なる靜止との兩面である。その動靜一如を表す。唯これを理性の面に映じて反省する時、個別と一般、動と靜等が區別されて現はれ來るのである。――併しこの反省と共に、個別者が自己の個別性を自覺する(二)の場合)と同時に、それは一般より分離する一面を得る。具體的全體に於ける一般との融合より離れて、それのみ獨立することが出來る。これは單なる理性の反省ではない。理性の反省に於ては、個別は一般と分たれつゝ尙內面的聯結のうちにある。然るにこれは、個別者としての個別者のうちに於ける自己內反省である。これが第二の意味の反省である。而してかゝる一般よりの絕緣の爲めに、個別者のこの自己內反省は內より何等の發展をも惹き起すことが出來ぬ。唯自己が自己のみと面する抽象的靜的反省である。而して同時に、一般も個別より絕緣されて單に一般としての一般の自己同一卽ち抽象的一般(曩の Natur)に墮す。この兩者が、本來の具體的統一の影の如きものゝ基礎の上に於て、影の如き結合に入る時、

曩に所謂Naturの薫染が生ずるのである。併し勿論この二つの反省は同時に起る同一の行である。第一の反省が直ちに第二の反省を惹き起すのである。

（第一の反省よりの見方を徹底したのは、ヘーゲルである。ヘーゲルに於ては個別と一般とはその純粹なる融合を奪はれ、本來の同一は Besonderheit の要素としてその痕を止めてゐる。「概念」の一要素としての Besonderheit は、曩の(二)及び(三)に於ける個別と一般との合一の痕である。Besonderheit は die Mitte として、個別の限定を表す。而して(一)の個別と(四)の一般とは定立され「判斷」をなすのである。併しヘーゲルに於ても Besonderheit は一般に、すべての形態に内在する酵母として、それの分化發展を促し、然もその發展を貫いて、常に中心であり、Mitte となつてゐる。即ちそれは、本來の融合的發展の力を理性の面に於て代表するものである。その力が das Einzelne に働き「概念」のうちに於て Besonderheit となり、更にこの Besonderheit として「概念」そのものを動かして「判斷」たらしむると考へられる。ヘーゲルも概念より判斷に移るに際し下の如く云つてゐる。Das Moment der Einzelheit setzt erst die Momente des Begriffs als Unterschiede, indem sie dessen negative Reflexion-in-sich, daher zunächst das freie Unterscheiden desselben als die erste Negation ist, womit die Bestimmtheit des Begriffs gesetzt wird, aber als Besonderheit, d. i. dasz die Unterschieden-

en erstlich nur die Bestimmtheit der Begriffsmomente gegeneiander haben, und dasz zweitens ebenso ihre Identität, dasz das eine das andere ist, gesetzt ist; diese gesetzte Besonderheit des Begriffs ist das Urteil (Ency. § 165)。

一つの現實態に働く個別と一般の二つの方面の力は、重々無盡のKreisを貫いて無限の奥より來るものである。ベーメがQualitätは神の力であるといふ如く、二つの力も無限の彼方より來り無限の彼方に於て合して居ると考へられる。かゝる分裂は前述の如く理性の處作である。ヘーゲルがVernunftやWissenの發展を說くのもこの故であらう。カントが理性の二つの使用を分ち、或は意志の從ふ世界と意志に從ふ世界とを區別する如く、自我は一面に於て自然に向ふと共に他面に於て純粹に創造的方面を維持して行爲の主體となる。吾々の自我も、純なる理解力によつて永久眞理の世界を、自由なる意志によつて事實的眞理の世界を創造する神より生れて、反省と直觀の兩面を含む小なる神である。自由なる意志を有する。自我の根柢に於て知と意と合し、日暮水天同一色といふ邊りに天に向つて開ける門があるのである。意識一般といひ、斷言的命令といふ如き超個人的要素は皆此處より入り來るのである。

併し、吾々が小なる神なるが故に、反つて神に反し得る自由を有する。こゝに曩の第二の反省の意味があるのである。具體的一般者の分化發展とは、一般者が抽象性を含むことを、超個性的統一のうちに更に個性的統一があることを意味するのであるが、自我がかゝる大なる自我と絶縁して個別者として獨立するとき、ins'chsein となるとき、泉の源の涸れたる如く發展を止めたる具體的一般は直ちに抽象的一般に變ずる。小なる神は反省することを反省し去ることは出來ぬ。反省を反省すれば矢張反省の圈のうちに落ちる。飽くまで反省卽直觀ではない。彼が自己內反省のうちに動く立場を脫し切らぬ限り、個別者として一般より離れてゐる。個別卽一般ではない。併しそれの本質が尙一般と內面的聯結のうちにある限り、一般は具體的であるが、個別者として自立する限りのそれを通して卽ちそれの個別性そのものを通して一般を見るとき、一般は抽象的として現れる。自然も神も actual には自我を超えるものとなる。それは同じく動靜二面を含み乍ら、動卽靜ではない。靜は für sich には抽象的にすぎぬ。而して Lucifer が神たらんとして墮落したといふ如く、もしこの抽象的靜に着して强ひて動卽靜たらんとすれば動も抽象に墮す。恰も一つの立體形を唯一つの視點より見れば平面となる如く、動靜の立體的關係の形式に於てゞは

なくして唯その無内容であるといふ點に於て、動卽靜となる。卽ち動も靜の平面上に落ちるのである。それは理性我が自然のうちに沒し去ることである。自然我となることである。理性我の自己忘却である。人間が神に最も近い模像であることが反つてこの墮落可能の原因である。Lucifer が最も神に愛せられた天使であつたといふもこの故であらう。創造されたものは創造せるものとは成り得ぬ。

das Einzelne が個別者として insichsein となることはそれが自然界に墮することを意味するが、その das Einzelne が眞に自己意識をもつ自覺的存在なる時は、その Allgemeinheit 卽概念の一要素として das Einzelne に含まるゝ一般が消えると同時に、das Einzelne 自身、自身の裡に一般となつて現れる。それはいはゞ自己を超えたる一般を自己の裡に統一する代りに、全く自己のうちに於て自己自身の Allgemeinheit を產むのである。概念に於ては各要素各々自立して而も各〻他のうちにあるといふ自由なる關係であるが、後の場合は一般を捨てたる das Einzelne が自ら自らの一般を產み、自ら概念となるのである。ライプニッツが惡の根元である人間の limitation を metaphysical と呼んだといふのも、かゝる事がある故であらう。もし惡が、唯單に完全なる理解力の缺乏から生ずるとすれば、假令完全なる善はなし得ずとも猶吾々は意志に於て恒に善

であり得る。然しカントがSelbstliebeを一般的原則といふ如く、吾々は意志に於て惡であり得る。罪を愛し得るのである。その際自らを顧る個人の前には一般者の代りに自己の影像が浮ぶ。かくして個人が絶對となり、個人と個人との間に生ずる社會や道德は消滅する。一切の惡は個人の絶對化、卽ちそれの一般者とその法則とよりの絶緣より生れるのである。

ヘーゲルはUrteilの進行としてE-A, B-A, E-B.の形を示して居るが、自覺的精神に於ける特殊と一般との關係もこれによつて考へることが出來るであらう。(Besonderheitは個人のうちの人格性の如きものと考へ得る)。曩にいつた場合はE-AがE-Bとなるのである。而してこれによつて、同時にかの進行は消えて、Eは空虛となりAとしてNaturが入り來つて自然的自我が現れる。卽ち個人の行爲に於ける一切の神的要素は消えて自然的衝動と代る。此のことを他面より換言すれば、自然的存在の狀態より一步自己に歸れる自覺的精神が、自然に囚はれることである。人間が人間として禽獸の國に居ることである。自我はこゝでは單なる漠然たる表象となつてvorschwebenして、その內容は自然が滿す。手段たるべきものが目的となるのである。衝動は自我の奧なる幽暗なる世界より自我を動かすものと考へられるが、それは空

虚なる自我に入り來つたNaturの動きである。ヘーゲルがDie Natur ist nichts auszer ihrem Wesen; aber dies Nichts *ist* ebensosehr; es ist die absolute Abstraktion, also das reine Denken oder Insichsein, und mit dem Momente seiner Entgegensetzung gegen die geistige Einheit ist es das Böse. (Phän. d. Geistes, S. 501)といふ如く自然も一の力として自我を引くのである。Ichが Ich=Ichである時、Ichは絶對的自我との關係に於てのみ眞にIchであり得る。併しこのIch=のIchは更に自己の裡にIch=Ichの形をとり得る。何となればそれがIchであるからである。かゝる空虚なる精神に自然が入れば、自然は力を得る。精神の有する力は自然の力となる。囚はるゝとはこの意味である。進まんとする力が反つて自己を引き止める力となることである。恰も常識に於ける素朴實在論が示唆する如く自覺以前ともいふべき狀態に於て自我が、自覺の先驗的統一を根柢として成立する認識對象界のうちに自己を見失ふと考へられるのと等しく、意志も欲求の對象のうちに沒して自然的衝動として働くと考へ得る。ヘーゲルも更にDie konkrete Rückkehr meiner in mich in der Äuszerlichkeit ist, dasz Ich, die unendliche Beziehung meiner auf mich, als Person die Repulsion meiner von mir selbst bin. (Ency. § 490)といつてゐる。

Ich=のIchがIch=Ichとなるのは自覺本來の意義ではない。然しそれもIchそのも

のゝ本性より由來する。その性質上可能的なるのみならず必然的である。惡とは自覺に必然的に伴ふ一面である。形而上的必然性を有する。それは自覺の本質を構成する要素ではない。この點から見ればプロチヌスの如く Nichtsein といふことも出來る。併し dies Nichts ist ebensosehr である。空虛なる Ich の內容となる Nichts は力である。カントは Alle materialen praktischen Prinzipien sind als solche insgesamt von einer und derselben Art und gehören unter das allgemeine Prinzip der Selbstliebe oder eigenen Glückseligkeit. (Kritik d. praktischen Vernunft. S. 22) といふが、かゝる自愛が一般的と考へられるのは、それが個人的自我そのものゝ成立に必然的に伴ふからである。而してかゝる自愛は總て他律的である。善をなすにも善そのものに對する愛よりでなく、罪を悔ひ惡を避くるにも惡そのものに對する憎惡よりでなく、他人の前、殊には己れ自らの前に、善人たる自己の姿を映じたる際の滿足と誇耀の快感が刺衝となる。之に反して眞の自愛は自己の人格に對する尊敬より產れる。而して自己の人格に對する尊敬は同時に他の人格に對する尊敬をも伴ふ。天國を得るものは心の貧しきものに限ると同時に心の貧しきものこそ眞の自愛を有するものである。此の生は反つて死である。身心脫落、脫落身心といふ如く此の生に死することによつて反つて永遠に生きると云

へるであらう。――カントが根本惡は意志そのものゝ感性的刺衝に對するHangであると云つた如く、惡は人性に原本的である。その基礎は叡智的性格そのものにある。惡は單に實在の缺乏ではない。Emanationが眞のdas Andereの定立でない如く、實在の缺乏とは實在に反抗する力の存在を意味する。das Negativeをnegativとしてpositivである。Nichtsは單なる無ではなくSeinより出でゝ之を滅す力である。意志そのものに於ても薄弱不純なる意志――カントの言葉を藉りればGebrechlichkeit; Unlauterkeit――のみならず、積極的惡意Bösartigkeit卽ち自愛をMaximeとする意志があり得る。而してリチヤード三世がRichard loves Richard: that is, I am I.と獨白する如く、かゝる惡意の源はヘーゲルの所謂純なる反省にある。總ての人間はアダムに於て罪を犯したといふ所謂原罪Erbsündeの說も、その眞意は此處にあると考へることが出來やう。天使の王の三者のうち、中位にあつたLuciferが自ら神たらんとして天界より追はれ、その司る國が墜ちてこの世界を生じたといはれるが、被創造者が所謂神の知的自愛を自らのうちに實現せんとすれば、必然的に自愛に陷る。而して自愛が曩の第二の反省によるものであり、これは理性の反省と同一の行によつて生ずるものとすれば、自愛と、知的反省の對象界なる現象の世界卽ち[この世界]の出現とは、矢張同一の行に由來

するといひ得るであらう。こゝにカントの二批判の統一の一つの仕方があり得る。

サタンの國は一般者と絶縁した個別者の王國、いはゞ absolute Diskretion の國である。Diskretion が Kontinuität の國である。ライプニッツは神は無限であり惡魔は有限であるといふが、ベーメが Gott wider Gott と云つた如く、惡魔は無限なる有限である。サタンは一切を嘲笑する力を有する。無限なる否定者である。彼は「高遠なる近付き難く、侵し難き一切のことに對する嘲笑や、內心の惡魔の高笑ひや、辱しめることの出來ないものを意識的に辱しめること」（「虐げられし人々」ドストエフスキー）をその仕事とする。高きものを嘲笑することによつてのみ自らその高みに觸れ得るのである。彼は自らの力を以て、自己の天使、自己の世界を創造し得ぬ。唯、神によつて創造されたるものに對する無限の temptation たるに止まる。故にその道には深みがない、內面的連續がない。惡の國へは pilgrim's progress を要せずして、一擧にして至り得るのである。カントが原罪は Folge でなくして Fall であるといふのもこの故である。これは、もしボサンケットなどの考の如く、推論が具體的なる體系の限定を意味するものとすれば、誤謬は背後に體系を有せぬと考へられるのに比較し得やう。

故に自覺が眞の自覺に歸り、個人が自己の內に、自己の上に、卽ち自己と他との間に、

一般者を見出し之と結合すれば、惡は止揚されてVersöhnungが成立つのである。認識に於て一歩自意識に歸ることによつて、理性を能力とする自我が顯れる如く、意志の世界に於ても反省を反省し、否定を否定して道德的自我が顯れると考へられる。然も惡がFallである如くこれも——同じくカントの言葉を用ひれば——Revolutionであつて Reform ではない。かゝる再生は明かに神のみの力による、卽ち恩寵によるのである。

（四）

かくして吾々の前には最後に唯一つの問題が殘されて居る樣に思はれる。卽ち神はサタンの墮落をその創造する際に豫知して居たであらうかといふ、惡の存在理由に關する最後の疑問である。惡が人間の立場より見て、形而上的に必然であるとしても、神がこれを創造しまたその存在を許す理由は遂に疑問に止まる。

「なんぢは惡きことをよろこび給ふ神にあらず、惡き人はなんぢの賓客（まろうど）たるを得ざるなり」といふ詩篇の言葉は、吾々は否定することは出來ぬ。かくしては道德はその根柢を失ふ。然も惡の事實が動かすべからざるものとすれば、光あれと云つた神は、闇に就いて豫め知る處がなかつたのであらうか。併し勿論これは神の全能に反す

る。然らば神は何故に惡を創造しその存在を許し給ふか。

ここに先づ注意すべきは、神に於ける知と意との關係は個人的自我のうちに見出されるそれと全く異ると考へられることである。反省されたる自我の立場に於ては、知と意とは明かに各々特異の世界を構成する。この點に於てはカントが理性の二つの使用を明瞭に區別したのは當然である。唯、知卽意なる立場に於て、或はスピノザの風に倣つて云へば唯一なる理性に於て、この二つの能力が如何なる內面的結合にあるかは、原福的の反省を反省することゝ共に不可能な事でなければならない。從つて吾々は例へばライプニッツが可能的世界を神の純なる悟性に、共存的世界をその自由なる意志に歸した如く、この二つの能力を神に附與し、或はこれを外面的に結合するに過ぎぬ。要するにロイスの言葉を藉りれば mortal conception of things を出でることは出來ぬ。神に於けるその關係は不可知であると云はねばならぬ。ライプニッツも The source of evil must be sought in the ideal nature of the creature, inasmuch as this nature is contained among eternal truths, which are in the understanding of God, independently of His will. といひ得るにすぎない。

吾々は今この最後の問題に面して否定も肯定も出來ぬ。寧ろ否定と肯定とを同

時にせねばならぬ。善惡の成立は一のintelligible Tatである。矛盾律と充足律の未分以前の世界にある。吾々は一なる神のうちに[凡てわれに罪を犯す者をば我これをわが書より抹さらん]といふ神と[其日を善者にも惡者にも照し、雨を義き者にも義しからざる者にも降せ給ふ]神とを分けて考へざるを得ない。これを吾々の世界に於て結合せんとすればそれを時間の上に繼續せしめて、その意志を(契約を)舊きより新らしきに變つたと考へ得るのみである。然も吾々はこの問題に於ては、この二つの神を共に同時に肯定せねばならぬ。こゝに私はベーメがGott hat's nach seinem Zorne wohl gewuszt, aber nicht nach der Liebe, davon Gott ein Gott heiszt. (Aurora, S. 156) といふ言葉に深い意味を見出すのである。然らずんばニイチヱがAlles „Es war" ist ein Bruchstück, ein Rätsel, ein grauser Zufall—bis der schaffende Wille dazu sagt: „aber so wollte ich es!"

—Bis der schaffende Wille dazu sagt: „Aber so will ich es! So werde ich's wollen!" といふ輝けき言葉を藉りて、永久眞理と共に事實眞理の創造者たる神のうちに考へられる矛盾の統一を髣髴するに止どめねばならぬと思はれる。かくしてその反面に、再生が神の恩惠であるといふことが强き意味を有し來るのである。

誤謬は一方に於ては單に人間の主觀的處作にすぎぬと考へられるが、もしデカル

トが、神より授けられたる知的表象に誤はないが、意志が知の及ばぬ處に判斷を下すために誤謬が生じるといふ如く、それが永久眞理の可能的世界より排斥されつゝ然も事實として、圓い四角といふ如き不可能なる表象の實在性と共に神の純なる自由意志のうちにその位置を見出すと考へれば、これと等しく、サタンも一方人間によつて初めて實在性を有し來るのであり、恰も空虛なる自我に外より入り來れるものが自我を囚へる如く、誘惑されるものがサタンに力を與へる、と考へられると同時に（イワン・カラマゾフの惡夢に現れる惡魔は下の如く云ふ。 Here when I stay with you from time to time, my life gains a kind of reality and that's what I like most of all. Here, with you, everything is circumscribed, here all is formulated and geometrical, while we have nothing but indeterminate equations!..... I am x in an indeterminate equtation.） 神はこれに對しても so wollte ich es! と云ふといひ得るであらう。 先の誤謬の論と對比して、こゝでも、ゼーメが天使の創造を叙すと共に Verstehe nach dem andern Prinzipio, aus welchem er [Herr Lucifer] ausgestoszen ward in das Äuszerste, welches auch das Allerinnerste ist. といふ深い言葉を引用せざるを得ない。——

人の裡に於ける善惡の爭鬪は、彼の成立の根柢をなす二つの方向の間の動搖である。而して人間は人間である間は、この爭鬪を脫れることは出來ぬ。人間は自覺の

世界の存在者である。自覺とは一方絕對我に結合すると共に他方自然我に聯なるを意味する。人間に於ては自然なくしては自覺は考へられぬ。人間は神の國と惡魔の國に屬するのである。而して解脫とは救濟によつてのみ可能である。現實に於ては惡は完全に征服され得ぬ。ライプニッツがEvery body responds to all that happens in the universe, so that he who saw all, could read in each one what is happening everywhere, and even what has happened and what will happen. (Monad. 61) といふ如く、所謂「業」といふ如きものを考へれば吾々は「鳥にさへ許しを乞はねばならぬ。總ては一の太洋の如きものである。總ては相流れ入り、相まじり合ふ。或る場處に於ける一擧手も地の他端に於て運動を惹き起すのである」(「ドストエフスキー「カラマゾフの兄弟」」)。行爲は必ず爭鬪を經て現實に入る。解脫せる行爲とは contradictio in adjecto である。現實ならざる行爲といふに等しい。吾々は、この世に送られて罪なくして人間の苦の總てを負ふて歸り給へる神の子によつて救濟される。私は宗敎について考をのべてこの稿を終らう。

(五)

絕對的なる知識を啓示的宗敎の上位に置くヘーゲルの哲學に於ては、情意は知識の內容の不完全なる把握形式として、ロゴスの發展中に、止揚さるべきものとなつて

現れて居るにすぎぬ樣な觀がある。併し啓示的の知のみが果して宗敎の全部であらうか。勿論啓示はその必須なる要素であつて個々の特殊宗敎間の優劣を定める標準となり得る程重要なものであらうが、然も宗敎の本質は啓示を含める、より高きものにあるのではあるまいか。或は啓示なるものが抑々單なる知以上の要求を含むものではないであらうか。パスカルが Le dessein du Dieu est plus de perfectionner la volonté que l'esprit. Or la clarté parfaite ne servirait qu'a l'esprit, et nuirait à la volonté. といへる如く、知が人格の全部ではない。寧ろそれは人格の他の要素の手段にすぎぬとすら考へられる。知は宗敎の用である。實踐理性の優位を以て、絕對なる知にすらも最後の立場が與へられるのである。ヘーゲルは勸りに內容といふことを力說して、宗敎は哲學の取扱ふ內容なくしては空虛なるものであり、哲學は理性の衝動によつて產れるもので、全く事物と眞理とに對する關心の上に立つものであつて、宗敎的要求とは毫も關する處がないと云ふが、吾々の肉體的欲求の背後に自然の攝理といふ如きものが働いて居ると考へられ得る如く、理性の衝動の背後にも一層高き目的觀を考へねばならぬ。カントも救濟の欲求を理性の根本に置いて Vernunftbedürfnis といつた。ヘーゲルには「哲學全書」の序に於て、アリストテレスと共に、Theorie こそ最も悅ばしきもの

であり、善きものゝうちの最善なるものであると云つてゐるが、嘗てロイスがヘーグル自身を thoroughly objective と評した如く、その哲學も餘りに哲學的である樣に思はれる。

所謂個人的自我と雖も單なる幻影ではない。眞の自我は考へると共に感じ、欲し夢みる自我である。一般的自我を燃燒し盡す瞬々の行爲のうちに、動かすべからざる個性を有する自我がある。藝術家の個性は單に一般的なる我の部分的な表れではない、一々が一以て他に換ふる能はざる全き全體である。自我は創造する自我である。純なる思惟も一の創造的發展であらうが、然も大なる流れの一支流にすぎない。唯思惟は一般化の方面である故、創造の流れの全幅を覆ひ得るが、その抽象的なる點に於て具體的全體の一部にすぎぬ。――現在は唯一の時である、直ちに永久である。パスカルも Le présent est le seul temps qui est véritablement à nous, et dont nous devons user selon Dieu. と云つて居る。かゝる現在に於ては反省も純なる行爲の内に溶かされる。現在に於ける自我は反省してゐる自我そのものである。理論はまだ我に對して外的たるを脱れぬ。哲學を學び神學を窮めて、尙從前の思者たるの感あるはこの故である。知解のみが具體的なる自我の全體ではない。否、その生きた部分ですらない。

78

「我信ずわが信なきをたすけ給へ」といふ言葉の示唆する如く、外より來れるものが内より出づるものとならねば、人格の活動とはならない。知識も人格的要求に裏付けられて初めて生命を得るのである。

ヘーゲルの哲學に於ては das Absolute が如何にして分出を行ふかは不明であるといひ、或はその哲學にはモナドロジーを缺くといふ非難がある。抑〻 Geist は自己のうちに自己否定の一面を有する。Geist の總ての辨證的運動は、この否定を次第に否定し去つて自己の根元に歸らんとする努力を意味する。ヘーゲルの所謂 Wissenschaft 〻この純なる否定の否定の究竟の立場卽ち Wissen の立場に於て成立するのである。唯ヘーゲルは抽象より具體への還相のみを說いて、往相については特に何等述ぶる處がなかつた樣に見える。唯單に das Absolute は subjektiv であるといふのみである。先の非難はこれより起るのであらう。また哲學史上に於て、その哲學が經驗的自然科學の勃興と共に崩壞したのも恐らくこれに因るのであると考へられる。併しヘーゲル自身も「精學現象學」の終に於て Das Wissen besteht vielmehr in dieser scheinbaren Untätigkeit, welche nur betrachtet, wie as Unterschiedene sich an ihm selbst bewegt und in seine Einheit zurückkehrt. (S. 519) といふ如く實在の眞相は動靜一如である。認識對象界そのもの

の連續が意志と考へられる。Wissen を最後の點まで行きつくした處に動そのものが現れて、直觀と反省とが同一平面上に重なるのである。Reines Anschauen ist nur ganz dasselbe, was reines Denken ist. (Ency. § 63 Anm.) と云ひ得るのもこれを以てゞある。最も具體的なる立場に於て眞なるものが、同時に最も抽象的に見た場合も眞である故である。——ヘーゲルの Wissenschaft は否定を徹底して否定を否定したる處に現れるのであるが、それを一歩飜つて肯定の立場に立つた時、純粹なる意志そのものが顯れ、同時に、Wissenschaft の Stoff となり從つて之より捨象さるべき一切の世界は、再び意志のうちに攝取せられるのである。絶對者は自己を顯現するのみならず分出する。ヘーゲル自身も Der ganze Geist nur ist in der Zeit といふ如く、現實に於て全體が働くのである。更にまた Das moralische Selbstbewusztsein weisz sein Wissen als die absolute Wesenheit oder das Sein schlechthin als den reinen Willen oder Wissen; es ist nichts als nur dieser Willen und Wissen. (Phän. d. G. S. 509) といふ如く、Wissen の世界に展開されたる各要素も、一の具體的なる作用としては意志の働きである。これは恰も一切の個體を自己の modi となすスピノザの實體が、自發性を有するライプニッツの無限なるモナドに碎かれたる推移に似て居ると思はれる。

目的となれるものは根柢となれるものである。最も具體的なるものは一のKreisの一端に於て最も抽象的なるものに接する。還相より見れば絶對知を頂點とせる人格內容の無限なる系列が展開されやう。併し恰も庭前の栢樹子の如き非合理的なるものが實は超合理的なるものであり、最も外的と考へられるものが最も深き內面的意味の上に立つが如くに、往相より見れば一擧手・一投足も直ちに全體なのである。ヘーゲルも下の如く言つて居る。

Das aus Handeln gehende Individuum scheint sich also in einem Kreise zu befinden, worin jedes Moment das andere schon voraussetzt, und hiermit keinen Anfang finden zu können, weil es sein ursprüngliches Wesen, das sein Zweck sein muss, erst aus der Tat kennen lernt, aber um zu tun, vorher den Zweck haben muss. Eben darum aber hat es unmittelbar anzufangen und, unter welchen Umständen es sei, ohne weiteres Bedenken um Anfang, Mittel und Ende zur Tätigkeit zu schreiten; denn sein Wesen und ansichseiende Natur ist alles in einem, Anfang, Mittel und Ende (Phän. d. G. S. 261). 卽ち行爲に於てはKreisが働くのである。勿論道德的行爲も、一面das Dialektischeの發展のうちに於ては、その一聯鎖として必然的意義を有するであらうが、他面現在の事實としては吾々をEntweder-oderの尖端に立たしめる。價値・反價値の區別、凡そ歷史の發展はこの尖端よ

り出づるのである。而して宗教はかゝる兩面を現實に於て統一せるものである。In das Geschichte ist Vernunft. といふが、自然科學の先驗的根據が哲學にある如く、歴史のそれは宗教にあるとも考へられる。――知識の方面に於て感性と理性とを統一するものが純粋なる意志と考へられるが、道德の方面に於て兩者を統一するは宗教的直觀である。而して更に知識我の根柢に道德的當爲の働きが豫想せらるゝ如く、宗教に於て知識我と行爲我とは最も内面的に結合される。こゝに於ては純なる意志は純なる愛として自我全體の根柢と考へられる。知も愛である。動靜一如の働きは多が直ちに一なる愛の働きであり、一にして全體なるものゝ自愛である。Dans le véritable amour c'est l'ame, qui enveloppe le corps. といふ如き愛はその象徴と考へ得るであらう。

（六）

宗教は理性的存在の住し得る最高の立場である。其處に於ては神と自我との合一が一切の根柢となる。純なる行爲に於ては神と自我とは一つの働きに沒する、併しかゝる生命の燃燒は瞬々の閃光を發するに止まる。緊張の後には神の影は絶えず弛緩せる自我を襲ふのである。宗教に於ける種々の樣相は觀照と行爲との統一

の仕方より生ずる。

(一)宗教の原初的形式は絶對者への純なるcontemplationであらう。「觀照」の場合には行爲は全く自我のうちに消えて、神と自我との統一は外面的偶然的となる。各々は他と無關係に如何なる形をも取り得る。行爲は全く兩者を結合する力を失つて居るのである。かゝる關係を一歩進んで內面的に考へたものがemanationである。「分出」に於ては關係は一方的である。然るに眞の結合は「創造」に見出される。創造の眞意義は他の裡に自己を見出すことである、愛の結合である。――創造するものと創造されるものとの結合は先づ「祈り」に於て表れる。祈りに於て自我は神に面接するのである。併しそれは尙兩者の分離を意味する。神は自我の裡に現れねばならぬ。――かくして神は自己のうちなる斷言的命令の主宰として畏るべき神となる。善き行爲あるものは賞せられると共に、惡しき行爲あるものは罰せられる。卽ち「戒律」の神である。――併し飜つて考へればかゝる斷言的命令こそ自我の本質である。自我は自律的である。命令は自己が自己に加へるのである。神は全く自己のうちにある。「純なる行爲」に於ては神と我とは一體となつて働く。an sichなる兩者の合一がこゝに初めて顯れるのである。兩者の內面的結合は神が自我のうちに沒するよ

り初まる。而してこれは既に半面に自我が神に沒落することを含む。眞の結合はかく兩者が他を含んで自立することに於て初めて可能である。

(二)純なる行爲に於ては自我は神である。自我の外にあつて對立せる神は、自我の裡なる神の影であつた。自我の外なる神は死せる神である。ツアラツストラが山麓の森に神を讃へる隱者と袂を分つて Dieser alte Heilige hat in seinem Walde noch Nichts davon gehört, dasz Gott todt ist! と怪しむのはこの故である。所謂佛にあへば佛を殺し、祖にあへば祖を殺すのである。かのマイスター・エックハルトも、靈の貧を說いて Dô ich stûnt [Da ich stand] in mîner êrsten ursuche, dô enhâte [hatte] ich keinen got. (Pfeiffer, S. 28) といつて居る。個人が道德を創造し價値の轉換を行ふ。自我は力への意志の動かす處となり、神の愛・隣人の愛は君主道德・奴隸道德に代るのである。自我のうちに沒した る神は、超人として姿を未來に現ずる。正にエマヂーションの反對である。自我は新らしき神を產まねばならぬ。それがためには、超人の前に於ては一瞬に消え失せるが如き Viel-zu-Vielen に對する顧慮を捨てねばならぬ。選ばれたる强者は自己のうちに根を張る Mitleiden を絕ち切る刻苦を要する。Selbst-Mörder たり得る力を要する。

(三)然も自我は飽くまでも自覺的存在である。行爲と共に觀照を、直觀と共に反省

を脱れることは出來ない。反省することによつて自我が立せられ、反省を反省することによつて、自我の外に他我が見出され同時に兩者の結合が成立つ。吾々は反省に於て自己の限定を自覺し、自己を超越する無限者に對せざるを得ない。――(ツアラツストラも Die Schönheit des Übermenschen kommt mir als Schatten といひ、更に終に於て自己の子等の近付けるを知るが、然も彼の子等もその成長に於ては、再び自己のうちに彼等の子等とこれを貫く無限とを見るであらう。無限者は絶えず自我に對立する。新らしき創造はかくして初めて可能である。自己超越の努力は永久に繰返へされねばならぬ。)――純なる行爲は内にヘーゲルの所謂 der ganze Geist を含む。主觀的作用のうちに種々なる客觀界の構成原理を含む。行爲が同時存在の世界を破る瞬間に於ては、同時存在の世界はそのうちに燃え盡されるのであるが、全精神は、自己を燒きたる灰のうちより生るゝ不死鳥の如く、否定のうちより新らしき世界を現はし出す。而して所謂反省はかゝる創造的全精神の抽象的統一であり、反省の所産なる所謂認識對象界はその全精神の弛緩より現れ、その創造的發展を、固定した姿に於いて representer するものと考へられる。かゝる生命の弛緩を本具せる存在の一々の行爲が、直ちに認識對象界のうちに落ち、同時にそれ(行爲)自身の Absicht に對してはその無

限に不安全なる表現であるにすぎないと考へられるのはこれによるのであらう。das an und für sich Gute は飽くまで理想である。それは宇宙の運命に對する無限なる洞察を必要とする。Absicht に於て如何に超人的なるものも現實の行爲の自覺に於ては、誰かラスコルニコフと共に遂に一匹の虫けらにすぎぬとの感を脱れ得やう。

吾々の自由意志は力への要求と共に當爲の意識を伴ふ。吾々は神に面しつゝ神に向ふ運命の銀線をベテレヘムなる星の光に認め得ると共に、吾を動かすものは神であり、吾が前に横はる進路は吾が裡なる神の投影であることを知るのであるが、之と同時に、吾は創造的意志として働く神そのものであり、前なる路は自らの額に汗して踏むべき路、自らの創造すべき路なるを知らねばならぬ。スピノザの amor intellectualis quo deus se ipsem amat と、ライプニッツがモナドは完全の度に於て進むに從ひ神の榮光を現すといふ考へとは、共に宗教に缺くべからざるものであると思はれる。エックハルトが自己のうちに於て自己より自己に近き神といへるは、この兩面を一片として直觀したものであらう。

「神の國は近付けり」と野に呼べる豫言者には、眞に神の國が目前に迫つて居たのであらう。宗教的直觀は時間を超越する。一念萬年、萬年一念、永遠の今に於ては理想

は直ちに現實Sollenは直ちにSeinである。ツアラツストラは月白き深夜犬の遠吠に永久回歸を直感したといふが、現實は誠に淺き夢の如きものであつて、夢幻と思はれるものこそ反つて直下の眞實である。詩人ブレークもFourfold and Twofold Visionと題していふ。

The Visions of Eternity, by reason of narrowed perceptions,
Are become weak Visions of Time and Space, fixed into furrows of Death;
Till deep dissimulation is the only defence an honest man has left.

同時に吾々は今一度飜つて考へねばならぬ。吾々が自己のうちに神を見出すのは、生の唯中に於て死の中にあることである。而して往生卽得、報恩報謝といふ如く、求むることを終つたものは與へねばならぬ。創造が直ちに沒落を意味する一なる發展にも、時間のうちに移されては、この二面を分つ分岐點を考へ得る。この世に死したものこそ、この世を動かし、この世を拯ふのである。ヘーゲルがAlle Dinge sind schlechthin nützlichといふ如き用の立場に於ては、現實界の一切は更に深き世界よりの意義を荷ひ、最も高き意味を與へられる。スエーデンボルグは主の天界は用の王國であるといふが、學問藝術等の自己目的々と考へられるものと雖も、自己を超えた目的

によつて最高の價値を得る。無用と思はれるものこそ反つて最も有用である。無用の用はこの世を永遠の世界に結合する力である。藝術のための藝術といひ、眞理のための眞理といひ、更には義務のための義務といふ如き嚴肅なる心持は、それ等のものが人生のためであるといふ自覺より生ずる。百丈の「一日作さゞれば一日食はず」といふ如き決心こそ、自己の道に精進する强き力を與へるのである。――宗教の極致に於ては夢の如き現實も單なる假幻ではない。現實は神の殿堂を支へる他の柱である。人間も神の前にゆらぐ影の如きものではない。神が自ら自らに働く力を意味する。我は盲目的意志に操らるゝオートマトンではなくして、この世を創造し行く意志そのものである。スエーデンボルグも主の天界は人類の基礎の上に建つて居るといつて居る。運命が自己を動かすのではない。自己が運命を呼ぶのである。意志こそ自我の本質である。かゝる用の立場は單なるMitleidenを超越する。現實を引き上げんとする努力と共に「總べてはこの儘でよし」といふ正念を失なはぬ立場である。私はかゝる立場に於てトルストイに一味の共鳴を感じ、實用主義者にもその動機に於て同感を表し得ると思ふ。

紅爐焰上看飛雪、刹々塵々海嶽寒、といふ如く、エラン・ヴィタールの尖端には全精神

が働くのである。時間も其處より創造され、自我も其處より時間のうちに入る。有名なる雙林大士の人從橋上過、橋流水不流の偈の如く、自己が自己を省る自覺的發展に於ては Ich=Ich の Identität は自己內反省の持續的開展のうちに自己を保つと共に、直觀的方面に於ては常に全精神が働くのであり、發展の隨處に自我の刻印を止め行くのが自覺である。自我そのものが變り、また變りつゝも自我そのものである。眞實在は働くものなき働き、また爲すことなくして爲すものといひ得る。

かゝる瞬々の行は神にも屬せぬ、勿論時間のうちに移された自我にも屬せぬ。かゝる罅隙より Gottheit の闇黑が覗くのである。エックハルトが In dem durchbrechen, da ich 'edic stên wil in dem willen gotes unde ledic stên des willen gotes und aller sîner werke unde gotes selbe, so bin ich ob allen creâtûren [mehr als alle Kreaturen] unde bin weder got noch creâtûre, sunder ich bin daz ich was [war] unt daz ich blîben sol nû und iemer mê. [immerdar] (Pfeiffer, S. 284) といふもこの故である。もし反省された自我の立場に立つてこの行を私のみの行爲といふならば、私は私の外には誰も見出さぬであらう。唯私にのみ面し私をのみ見出す悲劇的なる運命である。それは自覺の破壞であり痛ましき狂氣である。この世の存在にとつては全くの生は反つて全くの死である。この世の生は同時に死を含

まねばならぬ。自己が佛を殺すは佛が自己を殺すのである。有は無を殺し、無は有を殺す。創造は沒落である。人の創造に於て神は沒落し、人の沒落に於て神は創造する。而して大膽たるエックハルトが神は人なしには何事をも爲し得ぬといつた如く、これは二者の一行である。モナドは appetition をもつ。かゝる流動のうちに宇宙の進化が行はれ、無限なる文化が創造されるのである。熱情的なるニイチェが Wollen befreit: das ist die wahre Lehre von Wille und Freiheit と叫び、冷徹なるヘーゲルが Das Ziel des Geistes ist, die objektive Erfüllung und damit zugleich die Freiheit seines Wissens hervorzubringen (Ency. § 442) と說くも、各々かゝる發展の一面づゝを示したものと思はれる。「裏を見せ表を見せて散る紅葉」――これこそ創造しつゝ沒落し行くものゝ姿であらう。

編輯上の約束が餘り長く延びるので、やむを得ず未熟粗笨な、そして自らも今では(考へに於ても感情に於ても)承認しない所の少くない舊稿を以て、暫くその責をふさぐことにした。